

第17回

奈良県透析研究会

プログラム・抄録集

会 長：岡島 英五郎
会 期：平成5年2月7日(日)
会 場：奈良県新公会堂

プログラム

- 1 選択的血漿交換療法を施行した横紋筋融解症の1例 205
奈良県立三室病院 内科 松村典彦 他
- 2 再生不良性貧血合併症例の血液透析の経験 205
高井病院 高井英子 他
- 3 精神症状を示したアルミニウム骨症の経験 206
奈良県立医科大学 泌尿器科 吉田克法 他
- 4 血液浄化療法にて治療した溶血性尿毒症症候群頻回再発例の1症例 206
奈良県立奈良病院 泌尿器科 影林頼明 他
- 5 長期透析患者における悪性腫瘍合併症について 207
浅香山病院 泌尿器科 馬場谷勝廣 他
- 6 手指に壊疽を形成した糖尿病性腎症の透析症例 207
吉田病院 柿下 徹 他
- 7 透析低血圧症16例に対するDenopaminの使用経験 208
奈良県立奈良病院 泌尿器科 永吉純一 他
- 8 メシル酸ナファモスタットにより高カリウム血症を来した血液透析患者の1例 208
新生会高の原中央病院 河田陽一 他
- 9 慢性血液透析患者における肺血流分布と呼吸機能 209
済生会中和病院 内科 宮高和彦 他
- 10 ヒアルロン酸が著明な高値を示した症例 209
宣仁会白浜医院 大島 壽 他
- 11 透析患者における血清Advanced glycosylation endproducts (AGEs)測定の意義 210
康仁会西の京病院 藤本 隆 他
- 12 機能回復不全移植腎症例に対する吸着炭投与の経験 210
柏井クリニック 有馬正明 他
- 13 維持透析患者における上皮小体機能検査 211
翠悠会 本宮医院 平尾健谷 他
- 14 血液透析導入患者の教育の困難さを痛感した2症例 211
天理よろず相談所病院 人工腎臓室 猪田猛久 他
- 15 糖尿病患者のフットケアを指導して 212
田中泌尿器科医院 辻村仁美 他

16	当院におけるCAPD療法の看護体制について (体制を確立するまでの過程)	212
	榛原町立榛原総合病院 山本信子 他	
17	当院における低分子ヘパリンの使用経験	213
	新生会高の原中央病院 尾崎洋明 他	
18	低分子ヘパリンの使用経験	213
	榛原町立榛原総合病院 内科 斉藤精久 他	
19	透析患者における夜間desaturationについての検討.....	214
	天理市立病院 内科 大西徳信 他	
20	2.5mEq/L Ca透析液の臨床経験	214
	柏井クリニック 柏井浩三 他	
21	HCV抗体陽性患者に対するIFNによる治療効果について	215
	柏井クリニック 有馬正明 他	
22	維持透析患者の静脈狭窄症に対する経皮的血管拡張術の経験	215
	奈良県立医科大学 泌尿器科 二見 孝 他	
23	日生病院における透析導入患者100症例の臨床的検討.....	216
	日本生命済生会附属日生病院 近藤義雄 他	
24	当院における過去19年間の透析療法に関する統計及び糖尿病性腎不全患者の特徴.....	216
	西奈良中央病院 松本宗輔 他	
特別講演		
	「腎臓移植の展望」	217
	名古屋大学 第2外科学教室 高木 弘 教授	

1. 選択的血漿交換療法を施行した横紋筋融解症の1例

奈良県立三室病院

内科 ○松村典彦、福井寛人、山崎雅裕
川本篤彦、土肥直文、杉原清貴
北岡壮一、紀川伊克、藪田育男
下村英明、大塚文明、野中秀郎
紀川弥衛

泌尿器科 高島健次、小原壮一

慢性アルコール中毒患者に断酒時の強直性けいれんを契機に発症した横紋筋融解症の1例を経験したので報告する。

症例：47歳、男性。断酒3日後に強直性けいれん出現し、緊急入院。入室時やや意識混濁あり。血液検査上、r-GTP 1,688IU/l。BUN、Cr は正常。GOT、LDH、CPK(骨格筋優位、max23、606IU/l)、Aldolaseおよび血中ミオグロビンの上昇を認め、横紋筋融解症と診断。Nafamostat mesilateを含む3,000ml/日の補液および選択的血漿交換を施行。

考察：発症早期に治療を開始し、選択的血漿交換を併用することで横紋筋融解症に続発する急性腎不全を防止できると考えられる。

2. 再生不良性貧血合併症例の血液透析の経験

高井病院

○高井英子、椎木英夫、森田 昇、大山俊治
高井重郎

症例は64歳、女性。37歳から痛風があり、痛風腎による腎機能障害を指摘されていた。

58歳時に再生不良性貧血を合併した。平成4年10月31日に高熱、咳嗽が出現し、気管支肺炎に罹患した。腎機能が悪化したので、11月5日に血液透析に導入された。主な検査成績は赤血球数184万/mm³、Hb 5.9g/dl、Ht 18%、白血球数6500/mm³、血小板数4.7万/mm³、BUN112.4mg/dl、血清Cr6.7mg/dl、尿酸12.3mg/dl、Na132mEq/l、K4.6mEq/l、Cl95mEq/l、Ca3.7mEq/l、P4.1mEq/lであった。11月16日に内シャントを作成し、以後維持透析を行っている。血小板数は2.9万から6.9万/mm³の間を変動しているが、十分な圧迫によって止血は可能である。

まとめ：血小板減少のある患者においても、内シャントを用いて維持透析が可能であった。

3. 精神症状を示したアルミニウム骨症の経験

奈良県立医科大学 泌尿器科

○百瀬 均、吉田克法、田中雅博、谷 満
坂 宗久、米田龍生、岡島英二郎、三馬省二
平尾佳彦、岡島英五郎・精神科 猪原 淳
浜野クリニック

浜野正義

桃仁会病院 泌尿器科

山本則之

【目的】透析液の改善、Al製剤の内服制限によりAl骨症、Al脳症は減少しているが、Al長期蓄積による弊害は未だ認められている。今回、我々は精神症状を示したAl骨症症例を経験したので報告する。

【対象・方法】症例は41歳、女性。透析歴は6年、透析初期よりAl製剤内服していた。

1992年6月言語障害およびミオクロームスを認め、精神症状も出現し透析継続不可能となり、当院入院となる。血清Al濃度 $386 \mu\text{g/l}$ 、脳波上も異常所見を認めたため、Al脳症を疑いDFO負荷試験、骨生検を施行した。

【結果】DFO負荷試験で $\Delta 209.4 \mu\text{g/l}$ 、骨生検でも骨芽細胞、破骨細胞減少および石灰化前線への沈着を認め、Al骨症およびAl脳症と診断し、DFOによる治療を開始した。治療後血清Al濃度低下し、脳波所見および精神症状も改善した。

【結論】精神症状を示す様な長期透析患者においてはAl脳症を疑い、骨生検を含めた検査の施行および積極的な治療の必要性が示唆された。

4. 血液浄化療法にて治療した溶血性尿毒症症候群頻回再発例の1症例

奈良県立奈良病院

泌尿器科 ○影林頼明、永吉純一、丘田英人
新井邦彦、夏目 修、金子佳照
内科 岡村英生、山田雄三
人工透析室 下垣保美

症例は26歳男性、10歳時および16歳時に溶血性尿毒症症候群の既往を認め、兄にも溶血性尿毒症症候群の既往を認めた。平成4年3月20日より嘔吐と発熱が出現し、23日には出血傾向、貧血、腎機能障害が出現した。入院のうえ、ジピリダモールと新鮮凍結血漿の投与および血漿交換療法を行い、さらに腎不全に対して血液透析を施行し救命しえた。成人の再発性溶血性尿毒症症候群は稀な疾患であり、本症例の場合、遺伝的になんらかの凝固線溶系異常の基礎疾患を有すると考えられる。また治療においては、血漿交換療法が非常に有効であったと考えられた。

5. 長期透析患者における悪性腫瘍合併症について

浅香山病院 泌尿器科

○馬場谷勝廣

田中泌尿器科医院

辻村仁美、森恵利子、村元肖江、小野寺仁
米澤孝子、一番ヶ瀬秀子、柴田雅代
新垣三枝子、稲上真智子、段野ふさえ
田中正己

（目的）慢性透析患者の悪性腫瘍合併症例について検討した。

（対象）1985年12月から1992年12月までの7年間に慢性維持透析を受けた151例につき調査した。

（結果）151例中7例（4.6%）に悪性腫瘍の合併を認めた。男女比は4:3で、腫瘍診断時年齢は54-75歳（平均65歳）であった。7例中胃癌が3例、肺癌2例、口腔低癌1例、多発性骨髄腫1例であった。

（結論および考察）腫瘍発生の要因として透析患者の免疫能の低下が考えられるが、予後改善のため定期的検査、腫瘍マーカー測定により早期発見、早期治療が望まれる。

6. 手指に壊疽を形成した糖尿病性腎症の透析症例

吉田病院

○柿下 徹、外池みさ子、井西千都子

西谷幸造、福田真弓、山西行造、岡本 徹

田中泌尿器科医院

田中正己

症例は62歳女性、1989年偶然糖尿病を指摘されるも放置。2年の内に緑内障を発症し両側とも失明。更に腎症のためHD導入となったが、全身の強度の動脈硬化のためシャント作成に難渋した。肘部のシャント造設より2ヶ月経過した時点で同側のII指に壊疽を発生。保存療法にて改善しないためシャント結紮しCAPDに変更後改善傾向を見た。この症例では全身のメンケベルク型石灰化が非常に強く、またDM性神経障害も合併するという壊疽の易発生状態にあった所へ、シャント造設によるスチール症候群が加わることで壊疽を発生したものと考えられる。

7. 透析低血圧症16例に対する Denopaminの使用経験

奈良県立奈良病院 泌尿器科

○永吉純一、丘田英人、影林頼明、夏目 修
金子佳照

済生会奈良病院 泌尿器科

青山秀雄、黒岡公雄

新生会高の原中央病院 泌尿器科

松本 尚、河田陽一

透析低血圧症16例に対してadrenergic β 1 agonist である経口剤Denopaminを投与したところ、8例(50%)に低血圧の改善、9例(56.2%)に補液量の減少、11例(68.8%)にCTRの低下を認めた。また、低血圧にともなう全身倦怠感、めまいなどの自覚症状の改善を認めた。血圧改善を得られなかった6例に対して投与方法、投与量を変更しながら6ヶ月の長期投与を行った結果、5例(83.3%)に低血圧の改善、全例に補液量の減少、4例(66.7%)にCTRの低下を認めた。副作用は、3例(18.7%)に胸痛、1例(9.2%)に頻脈を認めたが、一時的なものであった。以上より透析低血圧症に対するDenopamin 投与は有効であると考えられた。

8. メシル酸ナファモスタットにより高カリウム血症を来した血液透析患者の1例

新生会高の原中央病院

○河田陽一、伊藤満知恵、北浦久美子
井村美紀江、谷 昌子、福田美代子
土井康司、松本尚

症例は73歳女性で人工血管によるブラッドアクセスにより外来にて血液透析を施行していたが、全身倦怠感と発熱にて入院となった。

入院後も発熱は治まらず皮下出血や止血困難も出現した。諸検査によりDICと診断しメシル酸ナファモスタットを0.2mg/Kg/hにて抗凝固療法を開始すると同時に発熱の原因であると思われる人工血管の除去術も施行した。血清FDP値およびプロトロンビン時間の改善を認めたが、同時に血中K値が上昇したため、メシル酸ナファモスタットの副作用と判断し15日間でその投与を中止した。中止後、血中K値は正常化した。

また皮下出血や止血困難も消失しDICも改善した。しかし約2ヶ月後心不全にて死亡した。

9. 慢性血液透析患者における肺血流分布と呼吸機能

済生会中和病院

内科 ○宮高和彦、八木秀男、平井妙代子
山本泰弘、斉藤圭一、中尾幸子
坂口泰弘、東口隆一、大貫雅弘
泌尿器科 大山信雄、趙 順規、渡辺秀次
放射線科 堀川典子、吉村佳子

目的：血液透析患者の肺拡散能の低下について肺血流分布との関連を検索した。

方法：血液透析終了安静後、呼吸機能検査と肺血流シンチグラムを施行した。

結果：1) 呼吸機能検査において閉塞性、拘束性障害はみられなかったが、83%に肺拡散障害を認めた。2) 肺血流シンチグラムにて23例中13例57%に肺血流不均等分布を認めた。3) 肺血流不均等分布群は均等分布群に比し%DLcoは有意に低下し肺拡散能の中等度低下が認められた。

結論：肺血流分布の不均等性が慢性血液透析患者の肺拡散障害の一因になることが示唆された。

10. ヒアルロン酸が著明な高値を示した症例

宣仁会白浜病院

○大島 壽、中川昭子、田中秀忠、脇 康彦
豊田尚武、白浜禱宣

CTSを初め、全身のアミロイド骨関節症をきたし、ヒアルロン酸(HA)が18,960mg/mlという著明な高値を示した症例を経験した。それを機にHAを検討したところ、健常者40人の平均は19.0mg/mlであったが透析患者117人について透析歴を5年毎に区切ってグループ別にみると透析歴の長いグループほどHAは高値であった。又全体を10年未満と10年以上の2つに大別した場合、10年未満のHA平均は、147.5mg/mlで10年以上では699.1mg/mlと4.7倍の高値であった。10年以上でHA150mg/ml以下のグループ(n=18)では導入時年齢が平均31.89歳なのに対し、10年以下HAが150mg/ml以上のグループ(n=15)では導入年齢60.40歳で30年の差があった。現在年齢にも約20年の開きがあり、高齢透析導入と長期透析者の高齢化がアミロイド骨関節症を促進させる重大ファクターと考えられた。

11. 透析患者における血清 advanced glycosylation endproducts (AGEs) 測定の意義

康仁会西の京病院

○藤本 隆、真井久夫、加藤 茂、石井健司
河合やす子、田中 泉、青木照美、中谷陽子
福島美津子、椿友加子、奥田明子、米田高美
前嶋昭彦、清水智恵、川口節子、高比康臣
奈良県立医科大学 第1内科
堀井康弘、加藤和美、栗岡英行、土肥和紘

透析患者における血清AGEsの意義について検討した。

透析患者の血清AGEsは109 μ g/mlと健常人の32 μ g/mlに比して高く、なかでも糖尿病由来の透析患者では125 μ g/mlであり糖尿病由来でない透析患者より有意に高値であった。

なお、血清AGEsは透析前後で差が認められず透析膜を通過しないと考えられた。AGEsは透析困難な尿毒素物質の一つと考えられる。

特に糖尿病由来の透析患者の合併症、血管障害の進展にAGEsは主要な役割を果たしている可能性がある。

12. 機能回復不全移植腎症例に対する吸着炭投与の経験

柏井クリニック

○有馬正明、柏井浩三
兵庫医大泌尿器科

宮本 賀、井原英有、生駒文彦

死体腎移植後に機能回復が不全であり、経口吸着炭を投与し、血液透析から離脱できた症例を報告した。症例は38歳女性で、温阻血10分、冷阻血16時間17分の死体腎を提供された。術後17日目から1000ml/dayの尿量を得、術後2ヶ月目には2000ml/day以上の利尿を得るも、BUN、クレアチニンはそれぞれ90mg/dl、6mg/dlであり、週1回の血液透析を必要とした。そこで経口吸着炭6.0gを経口投与した。シクロスポリンの血中濃度は適正に保持され、副作用もなく、またBUN、クレアチニン値も低下し、血液透析からも離脱できた。術後10ヶ月現在BUN50mg/dl、クレアチニン3.0mg/dlで社会復帰している。

13. 維持透析患者における上皮小体機能検査

翠悠会 本宮医院

○平尾健谷、石田悦弘、岩下浩二、柿本光司
佐々木憲二、本宮善恢

目的：維持透析患者におけるc-PTH低値例での副甲状腺機能をCa-free透析液にて検討した。

方法：Vogtsらの方法に準じ90分Ca-free透析液にて血清Ca濃度を低下させ、その後Ca濃度3.5mq/mlの透析液にて150分透析を行った。採血は開始時、90分時、終了後10分時の3回行った。

結果：i-PTHとc-PTHとの相関 ($r=0.732$) より2.2ng/ml以下の症例を低値例とした。イオン化Ca、血清Ca濃度の変化はそれぞれ2.19→1.42→2.05、10.38→6.85→9.50であった。

低値例でのi-PTHの90分時の上昇度平均107.0pg/mlであった。Ca0.1mq/mlあたりのi-PTHの変動差は平均11.7pg/ml低値を示した。

考察：Ca-free透析液による負荷試験は副甲状腺機能を評価するに簡便、且つ重要な検査法であると考えられた。

14. 血液透析導入患者の教育の困難さを痛感した2症例

天理よろづ相談所病院 人工腎臓室

○猪田猛久、小林靖雄、津田 淳、園田直樹
上原明彦、木田光雄、魚住珠江、増田たま江
伊吹芳江、松本慶三、井本 卓、奥村秀弘

透析を拒否し最悪の状態を受診した2症例について報告する。症例1は22歳男性（韓国人）。1年前より導入。来日後1週間透析せず、来院時Cr33.9mg/dl、K7.5mEq/l。症例2は44歳女性。透析を拒否し天理に旅行中肺水腫、全身浮腫歩行不能の状態を受診した。

BUN149mg/dl、Cr14.3mg/dl、K7.8mEq/l心停止寸前であった。いずれも緊急透析を施行した。

当院は宗教上の関係から医学が進歩した現在においても尚拘禁感、絶望感、恐怖感、挫折感等から透析を拒否し最悪の状態を受診される人が後を絶たない。この様な方々に対して適正導入の教育と啓蒙が必要である事を改めて痛感したので報告する。

15. 糖尿病患者のフットケアを指導して

田中泌尿器科医院 人工透析室

○新垣三枝子、林元肖江、今別府弘美
柴田雅代、一番ヶ瀬秀子、木下ヤスコ
高藤節子、森恵利子、米澤孝子、辻村仁美
小野寺仁、稲上真智子、段野ふさえ
田中正己

目的：糖尿病性腎症患者に病識を認識させ、フットケアの自己管理を行ない合併症の予防を行なう。

方法：自覚症状の強い4名に5週間に亘り、パンフレットと自己チェックリストを用い指導観察を行なった。

結果：病識が無かった患者は正しいフットケアができる様になり、傷や烏目は完治し、再発は認められなかった。神経症状に関しては著明な改善はみられなかった。

結論：フットケアの指導を行なう事で治療に対して自己参加させる事の意義は大きい。

諸症状の改善を認めたが神経症状は著明な改善がみられず今後も継続が必要である。

16. 当院におけるCAPD療法の看護体制について (体制を確立するまでの課程)

榛原町立榛原総合病院

北4階 ○山本信子、中山みゆき
安部伊知子、池内鈴子
透析室 新森純子

目的：近年、全国的にCAPDの普及率が増えている。当病院においても平成3年12月よりCAPDを導入したが、その導入課程の看護体制および問題点について検討した。

問題点：1. 看護婦がCAPDを理解するための十分な期間がなかった。2. 病棟にCAPDに適した処置室がなかった。3. CAPD院内体制が不十分であった。

結論：導入に際しては、スタッフの教育期間を十分に確保し、講習受講人数を増やすことが望ましい。清潔を保つためにCAPDルームの確保が必要である。院内体制を確立する事が患者指導及びスタッフ教育の向上につながった。

17. 当院における低分子ヘパリンの使用経験

新生会高の原中央病院

○尾崎洋明、龍野 智、政岡清美、椎崎千代子
佐藤和美、齊藤守重、吉仲弘充、河田陽一
松木 尚

目的：血液透析患者に対し抗凝固薬低分子ヘパリンの血液透析開始時および持続時投与量をまた低分子ヘパリンの総コレステロールおよびトリグリセリドに対する影響を検討した。

方法：血液透析患者11名（平均年齢：53.6±3.84歳）に低分子ヘパリンを開始投与量13～22u/Kg、維持投与量7.5～9.5u/Kg/hrより投与開始しはじめ、残血の程度によりその投与量を適宜増減した。

結果：低分子ヘパリン投与量は、最終的に開始時19.2±0.8u/Kg、持続時7.8±0.69u/Kg/hrで透析回路内に残血なく血液透析を施行できた。総コレステロール値はほとんど変化は認められなかった。トリグリセリド値は1例のみ著明な低下を認めたが、他の10例はほとんど変化は認められなかった。

18. 低分子ヘパリンの使用経験

榛原町立榛原総合病院

内 科 ○齊藤精久、田中秀次、藤本愛子
平田英二、浦上正弘、林 需
泌尿器科 上甲政徳、佐々木憲二
透析室 新森純子、林崎明美、榎本ヤチエ
福田ひろみ、内谷イツ子
尾崎実樹男、岡本和夫、兼安文昭

目的：慢性腎不全患者の血液透析の抗凝固薬として、通常ヘパリン（H）と低分子ヘパリン（F）の有用性について比較検討した。

方法：当院で血液透析を受けている患者7例を対象とし同一患者にHとFを投与した。

活性部分トロンボプラスチンテスト（APTT）、血清遊離脂肪酸（FFA）濃度を測定し、透析器内残血、穿刺部止血状況、透析効率、一般臨床検査、副作用の有無について調べた。

結果：透析器内残血は両群間に差はなく、F群がH群より穿刺部止血時間は短く、APTT延長、FFAの上昇は軽度であった。両群とも透析効率は充分で副作用は認めなかった。

結論：血液透析における抗凝固薬としてFはHと同等の有効性とより高い安全性を兼ね備えた薬であることが示唆された。

19. 透析患者における夜間desaturation についての検討

天理市立病院内科 同透析室

○大西徳信、前川純子、中野 博、中谷泰弘
佐野公彦、石井良子、松村澄雄、松下美鈴
玉木常子、蓮池波津世、中井由理子
宮本久子

目的：当院の透析患者において睡眠時無呼吸と関連する夜間SaO₂低下（desaturation）について検討した。

対象と方法：当院で維持透析中の慢性腎不全患者13例（男9、女4。年齢40～67）、パルスオキシメーターにより透析日とその翌日の2夜にわたりSaO₂を収録し、パソコンにより解析した。3%以上のSaO₂低下の時間あたりの出現回数をOD13と定義し、10以上を陽性とした。

結果と結語：OD13が10以上の例は透析患者で46.2%と高率に認められ、年齢と肥満度をマッチさせた透析患者以外の群全体13.8%、糖尿病群6.3%、非高血圧非糖尿病群3.3%より有意に高率であった。夜間desaturationは糖尿病、自律神経障害例が多かった。透析日とその翌日には差がなかった。

20. 2.5mEq/L Ca透析液の臨床経験

柏井クリニック

○柏井浩三、有馬正明、大音正明
奈良県立医科大学 泌尿器科
生間昇一郎、小原壮一、青山秀雄、百瀬 均
夏目 修、妻谷憲一、新井邦彦

維持透析患者7例について2.5mEq/L Ca透析液を使用し従来の3.0mEq/L Ca透析液使用時と比較検討した。検討時間はそれぞれ3ヶ月で骨代謝マーカー（血清C-PTH、Al-P、Ca、P、CaxP）ならびにP吸着剤投与量を比較した。C-PTH値の抑制に必要な活性型ビタミンD剤の維持投与量は症例によって異なるが2.5mEq/L Ca液使用期間には、その投与量は有意に増加し、Al-P値 C-PTH値のより強い抑制が果たされた。しかしC-PTH 抑制下では、従来と同様血清Ca値が高めで、P吸着剤としてのCa剤の増量は出来なかった。今後ビタミンD剤の投与方法、P吸着剤の内服の様式、P制限食などさまざまな工夫が望まれる。

21. HCV抗体陽性患者に対するIFNによる治療効果について

柏井クリニック

○有馬正明、大音正明、柏井浩三

兵庫医大泌尿器科

井原英有、生駒文彦

慢性腎不全患者と腎移植患者に対し、HCV感染の有無を検索し、陽性の一部の患者にIFNを投与し、その効果を検討した。

透析患者では75人中12人がHCV抗体が陽性で、この12人中8人がHCV-RNAが陽性であり1名が慢性活動性肝炎であった。移植患者では44人中18人がHCV抗体陽性であった。

透析患者1名と移植患者4名に α IFNを投与した。1名でHCV-RNAが陰性化した。3名は下痢、全身倦怠感、腎機能低下、神経炎等の副作用で投与を中止した。

HCV抗体陽性患者に対するIFN療法は有効な症例もあるが、副作用に注意して施行すべきである。

22. 維持透析患者の静脈狭窄症に対する経皮的血管拡張術の経験

奈良県立医科大学

泌尿器科 ○二見 孝、吉田克法、太田匡彦

谷 満、百瀬 均、大園誠一郎

岡島英五郎

放射線科 西峯 潔、前田宗宏

康仁会西の京病院

高比康臣

透析患者でシャント側上肢の浮腫腫脹が見られることがあり原因としてシャント側大静脈の狭窄閉塞が考えられる。59歳の男性が左上肢の浮腫を主訴に初診、各種画像診断で原発性静脈狭窄症に因る左鎖骨下静脈閉塞症と診断。先ず経皮的血管拡張術施行後、再狭窄防止の為EMS (expandable metallic stent) を同位に挿入留置した。この療法で浮腫は完全に消失した。今後透析患者の血管内狭窄性病変に対しPTAとEMSの併用療法を行うことでより安全、容易な治療が可能で、シャント寿命の延長が期待されると考えられた。

23. 日生病院における透析導入患者 100症例の臨床的検討

日本生命済生会附属日生病院

○近藤義雄、田中宣道、辻本賀洋、平松 侃

奈良県立医科大学 泌尿器科

坂 宗久

目的：1979年4月より1990年12月までに日生病院透析室で透析に導入した患者100例について透析導入時を中心として臨床統計観察を行った。方法及び結果：これら100例を急性及び慢性に分け、検討した。100例中男性は69例、女性は31例で、男女比は2.23:1であり、年齢は16歳から82歳で、平均は55.8歳であった。急性腎不全は32例で、慢性腎不全は68例であった。原疾患は、慢性腎不全では糖尿病が28例と最も多かった。急性腎不全では敗血症が6例で最も多かった。100例中49例が死亡、慢性腎不全では31例が死亡し、糖尿病が最も多かった。

結論：慢性腎不全では糖尿病が最も多く予後が悪い。急性腎不全では離脱群は少なく、非離脱群に比べて低年齢であった。

24. 当院における過去19年間の透析療法に関する統計及び糖尿病性腎不全患者の特徴

西奈良中央病院

内 科 ○松本宗輔、松本元嗣

奈良県立医科大学

泌尿器科 三馬省二、吉田克法

過去19年間において、当院において透析療法を施行した患者数は計303名であり、その内慢性糸球体腎炎による腎不全患者は180名(59.4%)、糖尿病による腎不全患者は72名(23.8%)であった。155名が死亡しており、死因の第1位は心不全の91名(58.7%)で、第2位は脳血管障害の17名(11.0%)であった。また、全体の5年生存率は59%、10年生存率は53%、15年では51%であったが、糖尿病性腎不全患者だけに限ってみると、5年生存率は26%、10年生存率では2%と極端に悪くなる。また現在透析を行っている18名の糖尿病性患者においては、慢性糸球体腎炎の患者に比して心疾患、眼底病変、血行障害、末梢神経障害などの合併率が高く、重篤なものが多く見られる。

特別講演 腎臓移植の展望

名古屋大学 第2外科学講座

高木 弘 教授

シクロスポリンの導入により臓器移植全体の成績が画期的に向上した。すなわち、アザサイオプリン（イムラン）の時代には腎移植後1年の生着率が生体腎移植で80%、死体腎移植で50%であったものが、シクロスポリンの導入により生体腎移植で95%、死体腎移植で90%と格段の上昇を認め、しかも併用副腎皮質ホルモンの投与量が1/4で済むという時代がきたわけである。生体腎移植と死体腎移植の成績の差が、従来は30%以上の開きであったので、生体腎移植を積極的に進める根拠があったが、シクロスポリンの導入後5%とその差が縮まってしまうと、今までと同じ根拠で生体腎移植を勧めることができにくくなった。移植の医師は社会に対して死体腎移植の普及に対する努力をしなければならぬという状況になったわけである。

現在われわれは、心臓死で腹部大動脈にダブルバルーンカテーテルを挿入して摘出腎を急速冷却させて死体腎移植を行っている。そのために移植後の急性尿細管壊死がつかまとい、透析を必要とすることが多い。わが国でも脳死移植が認められるようになれば、心臓、肝臓だけでなくこの腎臓移植においても移植後ただちに利尿を開始することが期待できる。そしてそれだ

け移植後の管理が容易となる。脳死臓器移植法案成立への期待とドナーカードの普及、移植コーディネーター制度の確立等山積する問題がある。

最近、異種移植が脚光を浴びており、われわれの教室でもその基礎的研究を開始している。